

# 近代以降の本山派大峰奥駈修行

福 家 俊 彦

## はじめに

紀伊半島の中心部を走る大峰山系は、奈良県側に吉野、大峰山、和歌山県側に熊野という古代以来の宗教的霊地を擁し、中古以来、日本独自の山岳宗教である修験道の一聖地として栄えてきた。その大峰の山々は、「厥レ以レバ大峰一乗菩提山ト者、金胎両部ノ淨刹、無作本有ノ曼荼羅也、森々タル嶺岳ハ金剛九会ノ円壇、鬱々タル巖洞ハ胎藏八葉ノ蓮台、山河ノ卉木ハ全ク遮那ノ直体、嶺風谷響ハ自ラ法身ノ説法也」(本山派「柱源供養法」表白文)<sup>1)</sup>と理解されてきた。

ことに「奥通り」とも称し、吉野から熊野へと連なる深山幽谷の山中を歩き通す大峰奥駈修行は、そのルート上に点在する七十五摩と呼ばれる行所を巡り、抖擻する修験道最大最高の行儀と位置付けられ、中古以来、絶えることなく存続してきた。

しかし、近代以降、修験道の歴史を振り返ると、明治維新の修験道廃止令、第二次世界大戦と戦後の宗教政策などによって修験道は大きな変革を迫られ、全国の修験者を統括していた本山派や当山派の寺院はもとより、大峰山をはじめ全国各地に散在する霊山の修験組織などに多大な影響を及ぼした。それは大峰奥駈修行においても例外ではなく、峰中での儀礼、修験者が峰中で宿泊する宿なども退転を余儀なくされ、時代を経るに従い、奥駈道全ルートを維持することが困難となり、その一部が途絶し、一旦、山下へ下り、再度登攀しなければならぬといった状態さえ招来した。

本来、修験道は、修行の場である「山に登り、山中を歩き、また山中に籠ること自体が信仰的に大きな意味を持つ」<sup>2)</sup>とされ、修験道の行儀の上で重要視されてきた大峰奥駈修行は、『修験学則』<sup>3)</sup>に「蓋シ其

ノ宗意タダ山林ニ居シテ苦修練行スルニ在リ」とある通り、あくまでも人家のある里に下りることを避け、峰中の靡や行所、霊地をもつぱら抖敷し、それによって験力を得ることを本義としている。従って、奥駈道が一部とはいえ途絶し、修験者が峰道を歩けなくなるといったことは決して望ましい事態ではなかった。

本稿では、明治期の本山派大峰奥駈修行の記録を翻刻、紹介し、近代以降の奥駈ルートの変遷、主として近世末にはすでに奥駈ルートが途絶していた南奥駈道復興への道程を辿ってみたい。併せて、筆者自身が本山派修験、天台寺門の末流につらなる者の一人として、第二次世界大戦後、天台寺門宗（総本山園城寺、滋賀県大津市）が行った南奥駈旧靡道の調査と復興、熊野から吉野へ至る順峰奥駈修行復活への経緯を報告しておきたい。<sup>6)</sup>

### 一、近代以降の本山派大峰奥駈修行の史料について

修験道は、明治維新にはじまる一連の宗教政策により大きな打撃を受け、その思想や儀礼も大きく変容、衰退し、伝来されてきた史料や文化財もその多くが失われた。明治五（一八七二）年の修験道廃止令により全国の本山派修験集団も再編を迫られ、本山派修験は、天台宗に属することになった。その後、明治七（一八七四）年に天台寺門派が成立すると、寺門派長吏（総本山園城寺）が修験道検校を兼務し、聖護院を大本山、聖護院門跡を大日本修験道総監とし、修験道復興に力を注ぐ体制がようやく整った。<sup>7)</sup>

しかし、教義書や修行記などを別にすれば、明治初期の奥駈修行の実態をうかがう史料は限られており、奥駈道の状況については知りたい。

一般に、修験道史料をどのような視点から如何に分類、整理するかについては、「修験道章疏綜合解題」<sup>8)</sup>や五来重「修験道史料について」<sup>9)</sup>等に有益な議論があるが、本稿で扱う史料は、主として歴史学的視点から、大峰の地誌的情報や峰中の地名、道筋などを知りうる『大峯細見記』<sup>10)</sup>や「高演大僧正入峰行列記」<sup>11)</sup>、「大峯七十五靡奥駈修行記」<sup>12)</sup>のように「峰入」や「峰中記」に分類されてきた史料の中から、特に修験者が実際に歩いたルートを直接に特定し得る史料、ことに「天保十年聖護院宮人峰随伴記」<sup>13)</sup>のような奥駈修行に参加した者の日記、修行記を指す。

この種の史料は、現在においても諸方にかなり退蔵されているやに思え、本稿で言及する園城寺に伝存する左記の三種の史料についても、今日までほとんど顧みられることのなかったものである。

〔史料一〕明治二十四年「峰乃落葉」

〔史料二〕明治三十一年「大峰山奥駈修行日記」

〔史料三〕明治三十二年「神変大士一千二百年に際する入峰日記」

〔史料一〕は、宇治・三室戸寺兆玉の記録を園城寺の田中良範（後の法明院住職・直林敬範）が明治三十（一八九七）年に書写したもので、明治二十四年の修行記に、明治十九（一八八六）年、同二十二（一八八九）年の過去二回の記録を集めて加筆したものである。南奥

駈道についても詳細な記載があり、また加筆された明治十九（一八八六）年の入峰記録は、嘉永二（一八四九）年以來、久々に聖護院雄真により深仙灌頂が執行された際のもので、史料の価値は高い。

尚、本史料は、園城寺法明院住職・滋野敬淳によつて第十四行所「拝み返し」から第一行所「証誠殿」までの抄訳が「或る山伏の記録（明治二十四年）」として「奥駈葉衣会」の機関誌『奥駈』第四号に紹介されている。

〔史料二〕は、園城寺慶忠が明治三十一（一八九八）年九月二日から十九日までの「聖護院ヨリノ例年修行ノ一行二連」つた際の日記である。明治期の奥駈修行の全行程を歩いた記録として、とくに南奥駈道のルートを検証する上で、今回、翻刻紹介するものである。

〔史料三〕は、明治三十二（一八九九）年、園城寺の田中良範が聖護院門跡に随行、入峰した際の記録である。この年の入峰は、神変大菩薩千二百年遠忌大法要を兼ねたもので、園城寺で大法要が執行され、その後、記念の入峰が行われている。但し、前鬼から笹の窟に向かったため南奥駈道には入つておらず、その記録を欠いている。

大正期以降の奥駈修行の史料については、大正十二（一九二三）年に聖護院から教団機関誌『修験』が発行され、以後、毎年執行された本山奥駈修行について知ることが出来る。ことに同誌に掲載された聖護院の宮城信雅による「大峰奥駈修行雑記」並びに「大峰山の靈蹟に就て」<sup>16</sup>は、本山派の大峰奥駈修行の概要だけでなく当時の奥駈道の状況について記録した貴重な史料となっている。

また、戦後における天台寺門宗の事跡については、今日までほとんど紹介されることがなかったもので、ここであらためて天台寺門宗の宗報『寺門』<sup>17</sup>によつて、その事跡を跡づけておきたい。

## 二、近世の大峰奥駈修行の概要

～「天保十年聖護院宮入峰随伴記」を中心に～  
 先ず、近世の本山派奥駈修行のルートについて確認しておきたい。

大峰奥駈修行では、一般に「本山派は順峰、当山派は逆峰」と言われ、熊野から大峰山系を北上し吉野へと抖敷するのを順峰、反対に吉野から山上ヶ岳を経て熊野へと抜けるのを逆峰と称している。中古においては『本山修験深秘印信集』<sup>18</sup>によると「三峰修行」と称し、春峰と秋峰、さらに夏峰があり、春峰を順峰「胎藏界、從因至果ノ峰、上求菩提」、秋峰を逆峰「金剛界、從果回因ノ峯、下化衆生」とし、夏峰を「胎金合行、因果一体、順逆不二、自他一如」と配当し教義化している。しかし、近世以降では本山派にあつても当山派同様、逆峰で奥駈修行がなされている。<sup>20</sup>

この「峰入り」、「入峰」とも称する大峰奥駈修行の道筋上には、峰々の随所に点在する岩や窟、滝などに両界曼荼羅の諸尊の顕現をみる行所、靈地が形成され、あるいは修験者の宿泊する宿も設けられ、それぞれに由緒縁起、故実が結びついてくる。近世になるとこれら峰中の靈地や行所は、七十五摩として整備され、修験者は、これを巡拝しながら抖敷行を行った。大峰奥駈七十五摩奥駈修行と言われる所以

である。

ここで、七十五靡が連なる大峰奥駈道の全ルートについて検証していくと、近世以降も吉野から山上ヶ岳を経て前鬼までのルートは、概ね維持されて今日に至っていることが分かる。

ところが、和歌山県側の熊野本宮から前鬼に至る、いわゆる南奥駈道については、そのルート上の宿が退転したり、山岳地帯という厳しい自然条件が重なって旧来の奥駈道が途絶し、ルート変更を余儀されている。中古以来連綿と存続してきた大峰奥駈修行ではあるが、修験者は、恰も歴史を超えて同一のルートを歩いてきた訳ではなく、享和三(一八〇三)年成立の『大峯細見記』巻五には、すでに「此七十五靡ノ行所ハ古ヘ順峰修行之秘記ナリ、今時逆峰修行ト成ルカ故ニ此行処悉ク行クコトアタハズ、総テ險阻仕ナルカ故、年来風雨山抜ケ山蹊滅塞リ、行歩絶ルナリ」と記録される状況に立ち至っていたのである。

さて、本山派では、近世においても歴代の聖護院宮が入峰している。ここでは、天保十(一八三九)年、聖護院雄仁の入峰に従行した侍医の上田法眼元孝が筆録した「天保十年聖護院宮入峰随伴記」<sup>22)</sup>を中心に、実際に彼らが奥駈修行で歩んだルートを見ていくこととする。

この時の入峰は、吉野から熊野に南下する、いわゆる逆峰であるが、天保十(一八三九)年七月二十五日から九月二十一日まで、五十六日間を要している。ルートは、八月五日に第七十五行所「柳の宿」(柳の渡し)から吉野(第七十三行所「吉野山」)に入り、六泊の

後、大峰山上(第六十七行所「山上ヶ岳」)へ。山上では第六十六行所「小篠宿」に逗留し、ようやく八月二十二日に「奥通之道」へ出発している。以後、宿所を記せば、第五十四行所「弥山」、第三十八行所「深仙宿」(二泊)、第二十九行所「前鬼山」、第二十行所「怒田宿」、葛川長泉寺、第十行所「玉置山」(三泊)を経て、九月二日に第一行所「本宮」に到着している。この間、十日間。同一箇所連泊した分を勘案すれば、今日の奥駈修行と概ね同じ行程である。

ここで特徴的なのは、第一に、全日程のなかで奥駈修行にかける日数に比べて吉野、山上ヶ岳、洞川周辺で多くの日数を要していることである。即ち、吉野では蔵王堂や勝手神社などの諸堂社に参拝、山上ヶ岳では当山派の聖地小篠宿に逗留し、安禪寺や洞川竜泉寺、蟠螂窟、天の川の天河大弁財天社、川上金剛寺、笙ノ窟や阿古滝などの行所、霊地を訪れている。これは、宮家準が、「門跡の峰入りは、前行・往路・谷や窟での修行・灌頂・復路との構成になっている」と分析した「谷や窟での修行」にかなりの日数をかけていることになる。やはり同氏が『大峰山峰中秘密絵巻』について、吉野から山上ヶ岳周辺の行所や霊地を描いた画面の長さが、実際の距離とは異なり、絵巻全体の長さに占める割合が多くなっている、との指摘に呼応する<sup>23)</sup>ように、当時の修験者にとっても、現在と同様、吉野、山上ヶ岳、洞川などの周辺の行所、霊地への参詣が大きな比重を占めていたことを示している。

第二に、一行が進んだ南奥駈道では、当時すでに本来の奥駈道が途

絶していた箇所があり、これを迂回するルートを通っていたことである。

この本来の奥駈道から一旦離れる迂回ルートは、以下の三区間である。

- (1) 第二十九行所「前鬼山」から奥駈道に戻るのに、第三十一行所「小池宿」を経て嫁越峠を越えて第二十行所「怒田宿」に至っている。つまり、前鬼山・怒田宿間にある第二十七行所「奥守岳」から第十九行所「行仙岳」までの行所を通っていないことになる。尚、現在では、嫁越峠ルートが廃道となり、戦後に南奥駈道が復興されてからは前鬼から太古の辻に登り直して奥駈道を通っている。
- (2) 第十八行所「笠捨」から第十行所「玉置山」に向かう途次で、貝吹金剛から一旦、上葛川村に下りている。『大峯細見記』巻之四にも「是レ中興ノ事也、其昔ハ笠捨ノ金剛童子ヨリ右ニ付テ行」とあり、これは当時、峰道上の宿が廃絶しており、宿泊できる民家のあの上葛川に下りざるを得なかったことを示している。
- (3) 第十行所「玉置山」から第四行所「吹越山」へ向う途中で、一旦、おそらく篠尾辻（切畑辻、七色辻）で奥駈道を離れ、切原に下りてから吹越山へ登っていることである。これも『大峯細見記』巻之四にも「然トイヘトモ中古順峰ノ行ヒ無キ故、絶テ行ク者ナシ、今記ス処モ本道ニハアラネドモ、近世是ヲ行フヲ七十五靡修行トス」とある通り、上記三つの迂回ルートは、近代以降もそのまま引き継がれることとなる。

### 三、明治期の大峰奥駈修行

明治期の奥駈修行における奥駈道、とりわけ南奥駈道については、先述の天保十（一八三九）年の記録とほぼ同じルートを通っており、明治維新後も奥駈道は概ね維持されていたことになる。さらに、南奥駈道について詳細に見ていくと次の通りである。

第一に、第二十九行所「前鬼山」から奥駈道に戻るのに、嫁越峠を越えて奥駈道に合流し、第二十行所「怒田宿」に至っていることは同様であるが、天保十（一八三九）年の記録では、第三十一行所「小池宿」を経て嫁越峠に登り、峰道に出て「ブナノタワ」、「乾坤門」を経て、第二十一行所「平治宿」に泊まる予定であったが、まだ「日高故俄二奴田宿御泊二成」という。

これが〔史料一〕の明治二十四（一八九二）年では、第二十七行所「奥守岳」、第二十六行所「子守岳」、第二十五行所「般若岳」を経て第二十三行所「乾光門」へ。〔史料二〕の明治三十一（一八九八）年では、「般若岳」に登り、嫁越峠を経て、第二十三行所「乾光門」へと至っている。いずれも第三十一行所「小池宿」に関する言及はなく、ことに明治二十四（一八九二）年の「奥守岳」の項に「俗にヨメコシト云、滝川辻トモ云フ」とあり、「般若岳」と「乾光門」の間にある十津川村滝川に下る分岐点滝川辻と嫁越峠との記述が錯綜している。現在、嫁越峠の道筋は廃道となっており、小池宿跡の所在を含め調査を要する箇所であろう。

第二に、第二十行所「怒田宿」から第十九行所「行仙嶽」、第十八

行所「笠捨」を経て、一旦、奥駈道を離れ上葛川に下り、そこで宿泊、再度、奥駈道に戻り第十行所「玉置山」へ至るルートは、「此所ヨリ昔シハ山ノ尾崎ヲ右ニ付キ而四阿之宿ト行ヒ、其レヨリ松宿、御池宿、古屋之宿、玉置宿ト行ヒシヲ、凡三百年程此方タカ嶽ヨリ葛川村ニ下タル也、是行仙カ嶽ヨリ古屋之宿迄テ水は無キ故也」(『大峯細見記』巻之八「第三十二カ嶽之宿」<sup>27</sup>)と言われた箇所、近世から峰道筋に水場がなく、また宿が退転していたために上葛川に一旦下ることになっていたコースである。よって天保十(一八三九)年には、地藏岳を経て、貝吹嶽から袖ヶ森で休息し、葛川長泉寺へ下り、再び葛川から中村、横峰、花折峠と休息をとって玉置山へ至っている。

〔史料一〕では、地藏岳、香精山を経て、古屋宿、水呑ノ金剛、ケツシヨウ森、塔ノ御前を経て上葛川へ、再度、第十一行所「如意珠岳」へ登り、稚児森、岩の口、横峰ノ金剛を経て玉置山へ至っている。また、本史料には、上葛川から如意珠岳へ登る際に「去ル二十二年、洪水ノ時、崩壊シテ一村ヲ挙テ土砂ニ埋没セシ十津川荒ノ最甚シキ所ナリ、山モニツ斗リハ崩去リテ跡ナシ、惨状想ヤラル、今尚ヲ通行ノ所ニ亀烈ノ箇所アリ危険」と明治二十二(一八八九)年の十津川水害の生々しい傷跡の様子を記録している。また、古屋宿についても「宿ハ跡形モナシ」と記されている<sup>28</sup>。

また、〔史料二〕では、地藏岳を経て上葛川に入っているが、その間の行所の記録がなく、詳細なルートは判然としない。おそらく貝吹

金剛から塔の谷峠を下ったのであろう。上葛川からの登りは「古屋ノ宿ヲ脇ニ見テ新道峠ヲ越」えて玉置山に到着とあり、この「新道峠」という名称も、明治二十二(一八八九)年の十津川水害後に復興された上葛川から岩の口で奥駈道に合流する道を意味しているのである。

第三は、第十行所「玉置山」から第四行所「吹越山」へ向う途中で、一旦、奥駈道を離れ、切原に下りていることは、天保十(一八三九)年と同様である。

但し、天保十(一八三九)年の際は、大森山、第八行所「岸の宿」を過ぎ、篠尾辻(切畑辻、七色辻)から切原に回っている。これが〔史料一〕では、第七行所「五大尊岳」、第六行所「金剛多和」、第五行所「大黒岳」から峰を伝って切原小字山在に下りている。また、〔史料二〕では、第七行所「五大尊岳」を経て、六道ノ辻から切原小字山在に下りている。若干の異動があるが、切原に下ることに変わりはなく、『大峯細見記』巻八には「玉置山ヨリ切畑村ニ行クヲ当山ノ修行道也、亦本山ニハ切原村ニ行クヲ是トス」とある通り、おそらく近世中頃から第五行所「大黒岳」から山在峠を経て第四行所「吹越山」へ向かう奥駈道の状態が良くなかったことから切原に下りることが慣例化したと思われる。

#### 四、大正十二年以降の大峰奥駈修行 ～奥駈道の二つのルート～

本山派による奥駈修行は、明治以降も毎年実施されていたと言わ

れ、大正十二（一九二三）年に聖護院から教団機関誌『修験』が発行されてからは、大峰奥駈修行の記録が掲載され、毎年実施されていたことが確認できる。

この雑誌には、他に大正十（一九二一）年七月十九日、聖護院門跡・岩本恭随による峰中深仙灌頂堂での深仙灌頂や大正十一（一九二二）年、地元天川村坪内区の尽力により弥山參籠所が建立された記事も掲載され、ことに大正十四年からは入峰に際し賀陽宮の御撫物が渡され、これを峰中深仙で加持することが恒例となったこと、昭和九（一九三四）年には役行者降誕千三百年慶讃願経埋納大入峰が行われたことなど、毎年三十名前後の規模で盛大に本山奥駈修行が執行されている様子をうかがうことができる。

以下では、『修験』創刊号（大正十二年七月一日発行）から第百二十四号（昭和十九年一月一日発行）をもとに、当時の本山奥駈修行の様相をみていきたい。

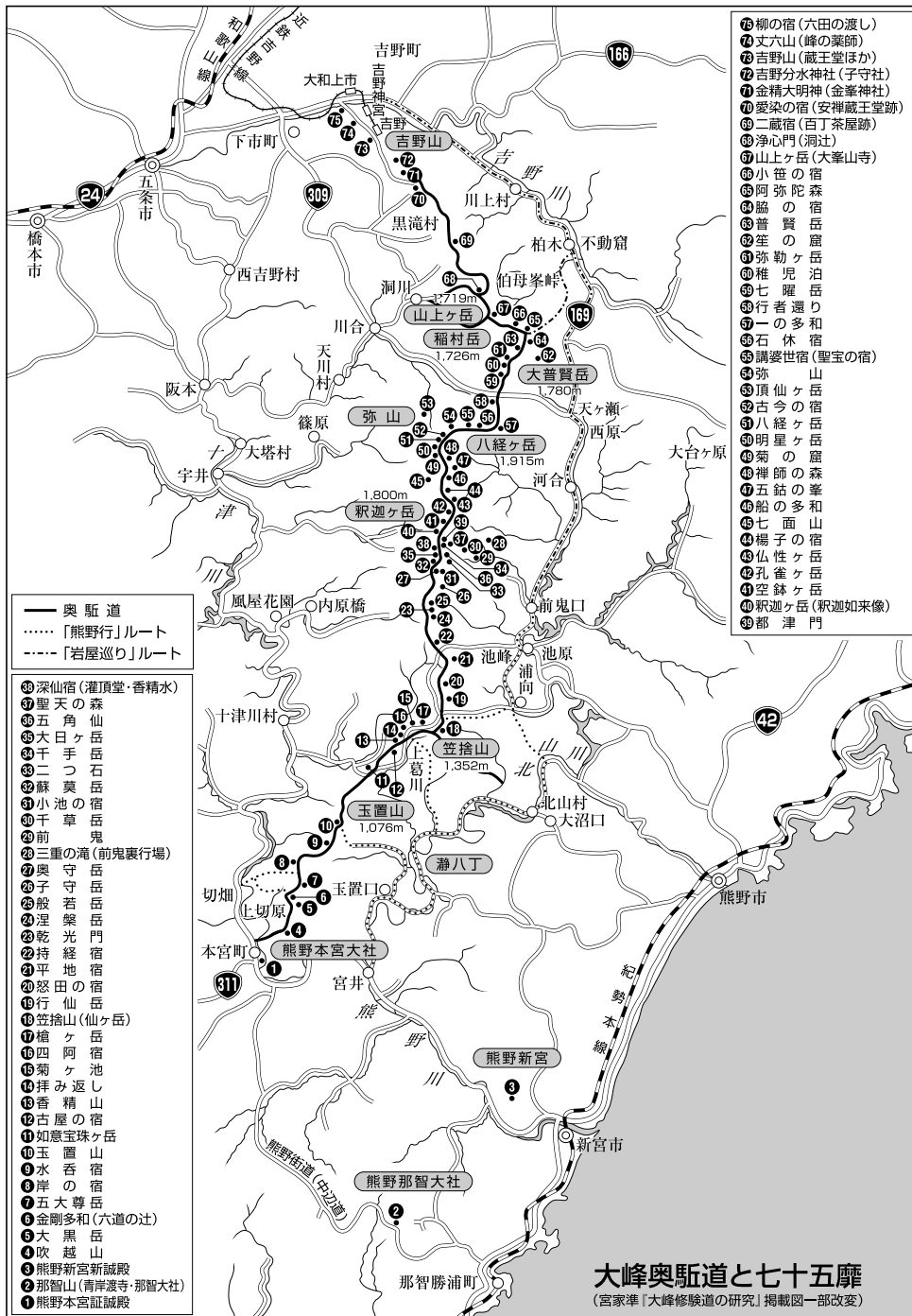
当時、毎年実施されていた本山奥駈修行の実際のルートを見ていくと、聖護院の宮城信雅「大峰山の靈蹟について」<sup>11</sup>において「本山の大峰修行は、熊野行と、岩屋巡りと隔年になっている」と記す通り、二つの種類に大別することができる。

「熊野行」ルートは、吉野から前鬼を経て、再度、前鬼から峰道に登り直し、南奥駈道をさらに南下し、本宮に至るルート。これが逆峰での大峰奥駈七十五靡を修行する本来のルートである。

「岩屋巡り」ルートは、吉野から前鬼までは同じであるが、前鬼か

ら前鬼口に下り、古代に出て東熊野街道を北上、河合、西原を経て天ヶ瀬の信者・岩本氏宅で一泊、ここから再度、大普賢岳を目指し、その東尾根の支峰・日本岳の南岩壁にある第六十二行所「笹ノ窟」はじめ朝日窟、指弾窟、鷲ノ窟に参り、その後、大普賢岳で奥駈道に合流、伯母峯峠を越えて大迫で東熊野街道に戻り、大迫、柏木近辺の不動窟などの岩屋を巡り、柏木で一泊、さらに北和田、迫と川上村を北上し、吉野町上市に抜けるルートである。但し、昭和二（一九二七）年以後は、河合で一泊し、第六十二行所「笹ノ窟」には登らず、代わりに大台ヶ原に登り、上市に抜けるルートが一般になる。

本山奥駈修行では、この二種の逆峰ルートを大正十二（一九二三）年以降、交互に隔年で実施しているが、いずれにおいても吉野から前鬼に至る区間は、二種のルートに共通している。現代においても通常、奥駈修行と言う場合、実際は逆峰で、吉野あるいは洞川から山上ヶ岳（大峰山寺）に登り、この共通のルートを歩き太古の辻から前鬼に下り、前鬼からはバスなどの交通機関を利用して本宮さらに那智、新宮へと回るコースをとることが多い。従って、この区間は、近世以降、現代まで連続と維持されてきた大峰奥駈修行のルートであるということが出来る。因みに、天保十（一八三九）年、明治二十四（一八九二）年、明治三十一（一八九八）年は「熊野行」ルート、明治三十二（一八九九）年は、「岩屋巡り」ルートに相当することになる。



大峰奥駈道と七十五摩  
 (宮家準「大峰修験道の研究」掲載図一部改変)



## 五、大峰南奥駈道の様相

上記の二種のルートの内、「熊野行」ルートの記録から前鬼以南の南奥駈道を検証すると、明治期以前とは、大きく様相が変わっていることに気付く。

まず、大正十三（一九二四）年以降の通常の「熊野行」ルートでは、前鬼から前鬼口へ下り、古代に出て東熊野街道を南下、北山村の池原、池峰を経て浦向で一泊、そこから笠捨峠へ向かい佐田辻で峰道に合流し笠捨山に登っている。

また、昭和十三（一九三八）年、笠捨峠が通行不能となり、不動峠を越え七色、大沼に出て、奥瀬から船で北山川を下り、瀨八丁を経て玉置口で下船、玉置山への「三里のつまさき上り」に登っている。昭和十五年も同様で、笠捨峠ルートに復するのは昭和十七（一九四二）年からである。

聖護院の宮城信雅は「現今本山の入峰には、前鬼裏行場を修行し、其日北山村に出て、浦向に一泊し、翌日笠捨を越えて十津川村葛川に出づ、笠捨より怒田宿等を遙拝動行す」と記しており、いずれにせよ、前鬼から峰中を離れ、一般の街道に出て、近隣の集落から再度峰中へ戻り笠捨山へと向かう大正期以降の奥駈ルートは、前鬼から嫁越峠を経て峰道に登り、奴田宿で一泊、奥駈道をさらに南下して笠捨山に至る明治期までのルートとは大いに異なっている。これは本来の奥駈道上にあった持経宿、平治宿が明治期には廃絶し、最後まで残っていた怒田宿も退転し、峰道上に宿泊施設を失った奥駈修行は、前鬼か

ら一旦、山を下りて浦向へと迂回、そこから笠捨山に再度登るルートをとり、佐田の辻で奥駈道に合流し、そこから怒田宿などの行所を遙拝せざるを得なかった事実を示している。

次に、笠捨山からのルートは、葛川辻から直接に上葛川に下っている。このルートは、第十六行所「四阿宿」、第十二行所「古屋宿」が廃絶して以後は、近世においても上葛川に下りることを通例とし、その後も宿が営まれることなく、聖護院の宮城信雅も「明治廿四年の本山入峰日誌には靡道を全部通過し、ここより十津川村葛川に出でて一泊し更に、靡道に登りて進みしと」と注記し、明治期までは、さらに南の地藏岳、貝吹金剛を通ってから上葛川に下りているので、この時点で、すでに地藏岳通りのルートも途絶していたのであろう。戦後においても「この地藏ヶ岳峰通り旧靡は水の便悪く明治初年以來絶えて修行する者なく雑木、篠竹茂り一步も踏み込むことが出来ず、何れも新道を上葛川に下っていた」といった状況であった。

また、上葛川から玉置山へは、大正十三年以降、特別の場合を除き、花折峠に向かう奥駈道に戻ることなく、瀨八丁に出て、船で玉置口まで北山川を下り、玉置山に登っている。

さらに、玉置山以南についても篠尾辻（切畑辻、七色辻）から下り、切原に出て吹越山に登っている。このルートは、本山派では、六道ノ辻から切原に下り、吹越山に登るのを通例としていたもの（『大峯細見記』巻八）、明治三十一年を含め切畑辻を過ぎ、第七行所「五大尊岳」を経て、六道ノ辻から切原に下っていた。ところが、大

正期以降では、篠尾辻から六道ノ辻間の五大尊岳周辺についてもルートが途絶していたことになる。聖護院の宮城信雅が「現今本山修行は水呑宿あたりより右して、御里村に下り吹越山に登る。すべて、現今、通過してない処は道茂りて到底通過すべからず、道刈、小屋普請等に費す処莫大なるを以て遺憾乍ら谷道を通す、何とかして従来の道を復興したいものだ」と記す通りであろう。

従って、南奥駈道は、明治三十一（一八九九）年以降、大正十三（一九二四）年の間に、従来の南奥駈道の多くの部分が通行不能となり、南奥駈道は、峰道を通して歩くことが出来なくなり、山から一旦近隣の集落まで下り、再度登り直すか、あるいは瀧峡を船で下るなど、旧来の奥駈道を大きく迂回するルートを利用せざるを得ない状態のまま戦後を迎えることになる。<sup>37</sup>

## 六、南奥駈道と大峰奥駈順峰修行の復興と天台寺門宗の専断

中古以来、本山派修験を統括してきた天台寺門派（総本山園城寺）は、明治以後も園城寺長吏を修験検校、聖護院門跡を大日本修験道総監として本山派修験を統括していたが、戦時体制下、昭和十五年（一九四〇）年に宗教団体が施行されるや、山門派（総本山延暦寺）、真盛派（総本山西教寺）と合併し、天台三派は一本化された。

終戦後の昭和二十（一九四五）年十二月二十八日に宗教団体が廃止され、新たに宗教法人令が公布、施行された。旧寺門派は、三派合同の天台宗から分かれ、昭和二十一（一九四六）年四月二十一日、天

台寺門宗を設立した。しかし、これと期を同じくして聖護院が、新たな宗派、修験宗（現在の本山修験宗）を設立したことから、本山派修験は、園城寺と聖護院を各々総本山とする二つの教団に分離してしまう。この体制は、現行の宗教法人法施行に際してもおおよそ承継されて現在に至っている。

以下では、戦後、天台寺門宗（総本山園城寺）と地元の関係者を中心に実施された南奥駈道の復興と深仙灌頂堂の再建、本山派伝統の順峰修行の復興という二つの復興事業について述べておく。

天台寺門宗では、戦後の新宗制設立直後の昭和二十二（一九四七）年から奥駈修行を実施し、以後、毎年五月下旬に入峰している。<sup>38</sup> 当時はまだ吉野から逆峰で前鬼まで至るもので、南奥駈道へは足を踏み入れていない。この状況に変化がみられるのは、昭和二十五（一九五〇）年、神変大菩薩千二百五十年の遠忌法要であった。この大法要を契機に、天台寺門宗の中村鍵寿や三井豊興らが中心となり、途絶していた南奥駈道の復興の機運が生まれてくる。

昭和二十七（一九五二）年の奥駈修行は、従来通り逆峰で修行しているが、吉野から前鬼を経て浦向に宿泊し、笠捨峠から笠捨山に登り、その後、上葛川に下り、玉置山を経て、切畑辻から熊野川に出で吹越山、本宮へと至っており、戦前の本山奥駈修行と同様である。しかし、この入峰に際して前鬼から笠捨山に至る区間、第二十七行所「奥守岳」から第十九行所「行仙岳」までの九行所が通行不能となっていることを確認し、奥駈道復興に向けて現地調査や地元の関係者に

協力を依頼、また費用について浄財を募るなど種々対策を協議している。<sup>39)</sup>

ここで当時、前鬼以南の南奥駈道における途絶していたルートを整理すると、大別して以下の三区間であったことになる。

(1) 太古の辻から佐田の辻を経て第十八行所「笠捨山」へ至る奥駈道（第二十七行所「奥守岳」から南へ第十九行所「行仙岳」までの九行所を含む区間）。

(2) 笠捨山から玉置山に至る奥駈道で、葛川辻から貝吹金剛へ向かう地蔵ヶ岳峰通り（第十七行所「槍ヶ岳（槍ヶ宿）」から南へ貝吹金剛を経て第十一行所「如意珠岳」までの七行所を含む区間）。

(3) 玉置山から大森山を経て吹越山へと至るルートで、篠尾辻（切畑辻、七色辻）から第四行所「吹越山」へ至る奥駈道（第七行所「五大尊岳」から南へ第五行所「大黒岳」までの三行所を含む区間）。

上記三区間は、前述の通り、近世以降、迂回ルートをとってきた区間におおよそ相当し、その復興は天台寺門宗においても大きな課題であった。

そして、(1)の区間については、昭和二十九（一九五四）年五月、中村鍵寿を中心とする十四名が前鬼から「北山郷の案内人二人」と共に、平治宿跡に野宿して開道に成功している。<sup>40)</sup> また(2)の「地蔵ヶ岳峰通り」は、昭和三十一（一九五六年）に上葛川の「森下氏及び土地の有志」の努力により槍ヶ岳から地蔵岳山頂を経て貝吹金剛まで通行できるように<sup>41)</sup>、貝吹金剛から如意珠岳を経て懺法の森に至る区間も、

やはり地元力の力により昭和三十二（一九五七年）年には通行出来るようになった。<sup>42)</sup> さらに、(3)「五大尊岳旧靡通り」は、昭和三十（一九五五年）年に切原道を止めて、「熊野吹越の山先達」の案内を得て、開道している。<sup>43)</sup>

従って、昭和三十二（一九五七年）年には、大峰奥駈七十五靡道はすべて開道され、全区間峰道を通じて奥駈修行が可能となった。

また、前鬼周辺の行所についても、昭和三十（一九五五年）年に「絶壁の岩山、現在は登らず」という第三十四行所「千手岳」に登り、翌三十一（一九五六年）年には第三十行所「千草岳」、第三十一行所「小池宿」、第三十二行所「蘇莫岳」へ赴いている。ここは「以前はこの三ヶ所を迂回して前鬼に出でたようであるが現在は直ちに前鬼に下る」とされた行所である。昭和三十四（一九五九年）年には第十一行所「如意珠岳」に登り、水呑金剛を確認している。

次に、大峰峰中深仙灌頂堂の再興について、天台寺門宗では、昭和二十八（一九五三年）年十月十日付令達第二十九号で「深仙灌頂堂再建」事業を決定している。<sup>44)</sup> 建築工事は、昭和二十九（一九五四年）年に用材調達、工事は昭和三十一年（一九五六年）年七月着工、同年八月二十七日に完了した。翌三十二年には、総本山園城寺において落慶慶讃大法要が執行され、引き続き、落慶記念大峰入峰修行が行われ、五月二十一日・二十二日の両日にわたって大峰峰中深仙において灌頂堂落慶大法要及び採灯大護摩供、深仙灌頂が執行されている。<sup>45)</sup> また、この再建事業の一環として、昭和三十一（一九五六年）年には、平治の宿も再建さ

れ、翌年、深仙での大法要の後、奥駈修行は前鬼に下りずに直接、平治の宿で宿泊し、以後、前鬼に下りた場合でも平治の宿に入宿している。<sup>48</sup>

その後、南奥駈道の復興に尽力したのは、前田勇一（一九一三～八一年）である。同氏は奥駈葉衣会を組織し、昭和四十八（一九七三）年には、機関誌『奥駈』を発刊、同誌には本稿で言及した（史料一）をはじめ数多くの伝承なども掲載されている。<sup>49</sup>

天台寺門宗では、昭和五十（一九七五）年、奥駈葉衣会の活動に呼応して、園城寺長吏の福家俊明（現、天台寺門宗管長）の発意により近世以降絶えて久しい本山派伝統の順峰修行が復興された。順峰奥駈修行は、同年五月二十一日から二十九日まで、修行者十七名により、奥駈葉衣会の前田勇一、当時の同会新宮支部の玉岡憲明をはじめ葛川や地元関係者の支援を得て実施された。<sup>50</sup>

翌年からは、熊野から吉野に至る順峰奥駈全行程を三回に分けて修行することになった。初年度は、熊野三山を巡拝し第一行所「本宮」から玉置山まで、二年目は、玉置山から笠捨山、行仙岳を経て太古の辻を前鬼山に下り、前鬼裏行場を修行。三年目は、前鬼から太古の辻に登り、深仙、釈迦ヶ岳を経て弥山へ、さらに山上ヶ岳に至り吉野に下る。天台寺門宗では、現在も奥駈全行程を三年で満行する方式をとっており、毎年三十名前後の参加者をもって実施されている。

尚、峰道を通して歩くには、その途次に宿が必要となる。特に南奥駈道の笠捨山から前鬼の間では、怒田宿が廃絶した後は、昭和三十一

（一九五六）年に再建された平治宿が利用され、昭和五十五（一九八〇）年以後は、昭和五十四（一九七九）年に奥駈葉衣会により建立された持経宿（持経小屋）に宿泊し、現在に至っている。<sup>51</sup>

## おわりに

去る平成十六（二〇〇四）年、第二十八回ユネスコ世界遺産委員会において、大峰奥駈道は、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された。これは、修験道の聖地である熊野三山と吉野を結ぶ大峰奥駈道とそこで行われてきた奥駈修行が、日本固有の宗教文化のひとつであることが、国際的に認められたことを意味している。

本稿では、ここまで近代以降の南奥駈道の変遷を主に辿ってきたが、大峰奥駈道にとって最大の課題は、やはりその維持と保存である。それには修験各教団による奥駈修行が継続的に実施されることもとより日常的に奥駈道や宿を維持管理する活動を担う地元関係者、諸団体の理解と協力が不可欠である。

復興された南奥駈道についても吹越山周辺等では奥駈道が林業用道路によって寸断されている箇所もある。すでに奈良、和歌山両県の教育委員会などを中心に世界遺産となった大峰奥駈道の保存、整備の話し合いも始まっているという。<sup>52</sup> 漸く復興された行所も主要ルートからはずれているため、現在では行かなくなった行所もあり、前鬼山からの嫁越峠ルートや小池宿の所在についても調査確認が必要であろう。現実に奥駈道を維持していくには課題が山積しているのが現状である

が、今後の有意義な活動が期待されている。

また、修験道、大峰奥駈道の宗教的、歴史的意義を世界に発信するには、修験道の思想や儀礼の研究はもとより、さらなる史料の発掘と保存が重要となる。ことに、奥駈修行の実態、日程やルート、行所における儀礼などを知り得る記録は、中世はもとより近世、近代以降についても極めて限られているのが現状である。今後、いっそうの史料調査、発掘が待たれるところである。

### 【付記】

本稿執筆に際し、園城寺法明院住職・滋野敬淳大僧正には、貴重な史料を快くご提供いただき種々ご教導を頂いた。また、新宮山彦ぐるーぷ代表の玉岡憲明氏には、同会が永年取り組んでこられた千日刈峰行等の活動内容並びに前田勇一氏、奥駈葉衣会について貴重なご教示を頂いた。両氏のご厚意に深甚の謝意を表します。

### 【史料紹介】

#### 〔凡 例〕

一、本史料は、本稿〔史料二〕明治三十一年「大峰山奥駈修行日記」(園城寺勸学院所蔵)の全文である。

小帖、縦一三・一厘、横一八・三厘、墨付十九枚。

筆者の慶忠は、権少僧正、園城寺竜泉院住職、義仲寺住職を兼務し、明治三十五(一九〇二)年二月十五日寂。

二、字体は、原則として常用漢字体に改め、読点、並列点を補った。

〔史料〕大峰山奥駈修行日記 明治三一(一八九八)年九月  
(表紙)

「明治三十一年九月

大峰山奥駈修行日記

自己ノ覚ノミ、誤字モ多カラン歟、他見ヲ禁ス

初入峰

沙門慶忠誌」

明治三十一年九月 大峰山奥駈修行

初入峰 日記

余ト本間晃玉ノ二名ニ入峰修行見習ヲ命セラレ、聖護院ヨリノ例年修行ノ一行ニ連ル

二日、晴天

本日午前、同修行者、本間晃玉師及ヒ和田慶玄、柿澤敬讓ノ諸師ト共

ニ発山、疏水通船ニ乗シ、聖護院ニ至リ、身回り装束万端ノ準備ヲナ

ス

三日、朝雨後晴、本日出発

午前第九時、聖護院内一般僧俗共玄闕前ニ集合、門主先進ニテ護摩堂

前ニ至リ勤行、経頭 岩本恭隨(三條錫杖・心経・諸真言・円頓者・

本覚讀)、次ニ、神変堂前ニ至リ勤行、終テ出発、見送人及修行人共

ニ合シテ京都市中ヲ行列シ、伏見ニ至ル、同所稲荷神社鳥井前・玉屋

ニテ一般中食ス、スズカケ具ノ諸等ヲ脱シ荷行利ニ納メ而シテ袴・結袈裟・頭巾・金剛杖等ノ行装トナル、中食終テ行李ヲ調へ、門主以下数多ノ見送人ト袂別シ、伏見駅ヨリ零時四十二分発車ノ奈良鉄ニ乗シ大和奈良ニ至ル、同所ニテ下車シ、切符ヲ求メ南和鉄道ニ乗り替へ高田ニ至ル、爰ニテ乗り替へ大和吉野郡葛駅ニ至ル、同所ニテ下車、夫ヨリ步行スルコト一里余、吉野郡檜垣本村宿屋業・京文へ着、投宿ス、時七時、同行人名、岩本恭隨、余、本間晃玉、岩本英雅、船寺竜澄、俗人・中家文之助、平井新兵衛、若代正明、辻久吉（荷持人）外二人

四日、晴天、本日起床後、直チニ宿裏吉野川ニ於テ水行

歌ニ曰ク、たらち祢のおらでさせたる皮衣今聞脱捨ル吉野川上  
午前七時出發、行コト凡廿四五町、同郡六田村渡場ニ至ル、即、吉野川ナリ、船中ニ於テ川上ニ向ニ向ヒ勤行、之レヲ川上ノ勤行ト云、夫ヨリ步行凡三丁、山手ニ登リ

柳ヶ宿、勤行 神變尊ヲ安置ス、是ノ所順峰ノ最終ノ行所ナリ、吉野山ニ登リ係ル

歌塚、是所、眼下ニ吉野川及上市村ヲ見下シ眺望

吉野宮、勤行、一目千本、是所ニテ休憩ス、之ノ辻辺、桜樹実ニ多シ、然リト雖モ花ノ時ナラザルヲ以テ左程感セスト云ヘトモ陽春桜花爛漫ノ際ハ喚カシト追想セラル

藏王権現、勤行、本地仏釈迦・千手・弥勒、入口ノ鳥井、質ハ銅ニシテ巨大ナリ（吉野なる金の鳥井に手を添へて弥陀の浄土へ入ルぞ宇れ

之き）

天満宮、勤行、藏王堂ノ横手ニアリ

山口神社、勤行、勝手明神トモ称ス、往古、静御前ノ舞ヲ舞ヒシ所ト  
言伝フ

宿坊喜藏院、着午前十時三十分、本日ハ爰ニテ投宿、檜垣本村ヨリ当院迄凡二里

午後、吉野山中ノ名所ヲ見物ス

如意輪堂（正行ガ矢尻ヲ以テ書セルかへらじとノ歌ノ実物ヲ拝見ス、他ニ宝物等）

竹林院庭園、吉水神社、元ハ吉水院ト云テ、寺ニテアリシ由

五日、晴天、本日洞簀川ニ向フ

午前八時出發、頃橋、地藏峠等ヲ経テ川戸村ニ着、同所宿屋業・菊屋ニテ中食ス、吉野ヨリ此所迄二里、零時四十分出發、稍歩行シテ小南峠ニ係ル、山腹松ノ茶屋行者堂勤行、此所ニテ休憩ス、俗ニ出向迎行者ト云、菊屋ヨリ廿五丁、行クコト又廿五丁ニシテ頂上ニ達ス、坂道急ナリ、頂ニ行者堂アリ、勤行、同所茶店屋ニテ休憩、夫ヨリ下ルコト廿五丁、洞川村ニ達ス、先ツ同所竜泉寺ニ至リ本堂、不動堂、竜王堂ニテ勤行、本堂弥勒菩薩ヲ安置ス、真言宗ナリ、聖護院宮御入峰ノ節ハ是寺ニテ御宿申上ゲシ由、夫ヨリ同所薬屋・西村清五郎方ニ投宿ス時午後三時

六日 大降雨 本日登山

出發前、行装ヲ調へ当家仏間ニ於テ勤行スルヲ例トス（略職法）、午

前八時出發、御座之檜笠ニテ雨除ノ準備ナシタルモ降雨極メテ多甚ナルカ故ニ漸ク行コト数丁ニシテ雨身ニ通シ実ニ気味悪シ

洞竈ノ岩屋、勤行、路傍ニ行者堂アリ、夫ノ所ニテ岩屋ヲ遙拝ス、望ノ者ハ案内者ヲ求メ洞中ヲ見物ス、洞中名所数多アリ、一ノ門・二ノ門、行者護摩焼キ場、天ノ川等、余ハ記憶セス、洞穴右ヨリ左ハ突抜ケアリト云ヘトモ中央低クシテ水多ク溜リアルヲ以テ通過スルコトヲ得ス

足摺行者堂、勤行、此所迄、役氏ノ母公来リ、是ヨリ行コト叶ハサルヲ以テ足摺ナシタル所ト聞ク、堂内ニ母公木像モ安置セリ、途中ニテ茶所ニ休憩シ洞辻ニ至ル

洞辻行者堂、勤行、休憩、茶モアリ、力餅モアリ  
油溢（こほし）、九穴ノ蔵王、小鐘掛

鐘掛、行所、勤行、歌ニ曰ク、鐘かけととふて尋祿て来て見れば九穴の蔵王下にこそ見る

御亀石、勤行、歌ニ曰ク、お亀石ふむなたたくな杖つくなよけて通れよ新客乃もの

等覚門、勤行

西ノ覗、勤行、先達中家文ノ助、若代正明ノ助ヲ得テ覗ク、谷底深キコト幾千尋ナルヲ知ラス、人ノ噂ニ聞ク如ク谷底ノ樹木実ニ青蒼ノ如ニシテ嶮ナルコト云ニ方ナシ、一見惣身ニ粟ヲ生ス、鐘掛、御亀石、西ノ覗、此三ヶ所ヲ表行ト云フ

山上喜蔵院參籠所へ着時、正午、中食ノ後、本堂前ニテ大護摩修行、

護摩師・岩本恭隨、神供師・余、衆僧・晃玉、竜澄、英雅、紀州不動院、承仕・若代正明、中家文之助、大護摩順序、宿坊ヨリ行列、下座先進、本堂ニ至リ正面蔵王権現勤行、次ニ横ノ神変尊勤行、終テ護摩壇ニ進ム、神供師ハ読經始ムルヲ待テ神供壇ニ進ム（十如是、自我偈、尊勝陀羅尼、諸真言）

本堂建物壯觀、横十一間、奥行八間、南向屋根銅葺  
夕刻、初夜勤行、弥陀經、參籠所持仏堂

七日、雨、朝、勤行、法華懺法

朝食後ヨリ裏行ス、行場名所、不動登岩、押分石、護摩ノ岩屋、屏風石、飛石、東ノ覗、胎内クグリ、袈裟掛岩、衣掛岩、御馬屋、笈之岩谷、御丈岩谷、オノ河原、天野川、裏ノ亀石、大黒岩谷、蟻ノ戸渡、平等石、元結払、歌ニ曰（平等石回りテ見レハアコ滝ノ死スル命ハ不動クリカラ）

午前九時頃ヨリ小篠ニ至ル、途中名所、化粧ノ宿、投地藏、大黒岩、勤行、コカツ神、ケカツ神、勤行、阿伽井水

小篠、行者堂アリシ所、風雨ノ為メ転覆シアリ、安置スル神変尊ハ現時、山城国醍醐三寶院へ下ケアル由、元小篠宿ハ三寶院ノ領ニテアリシニヨルカ、同所ニテ大護摩修行、護摩師・恭隨、神供師・慶忠、帰途、御花島ヲ見物ス、美麗ナル小笹原ニシテ諸方ノ見晴シ能ク、山下洞川杯モ見ル景色佳ナリ、山上ヨリ小篠迄、廿五丁、本日午後三時頃ヨリ恭隨、英雅、正明等下山、帰途ニ就ク、余等奥駈修行者ナルヲ以テ本日モ同所ニ滞留ス、奥駈人数、余、本間晃玉、船寺滝澄、先達・

中家文ノ助、中野喜市、辻久吉（荷持）、松谷松藏（案内老）、洞川ノ人ナリ、外ニ岩本弥一、帰途ナルカ故ニ途中迄同行ス、山上及小篠ノ大護摩支度等ノ用意ハ洞川村・亀谷林造ト云モノ例年万事引受周施ス、支度料旁謝礼トシテ金五円ヲ送ルヲ例トセリト

八日、快晴

午前六時出発、奥駈ニ向フ、昨日迄雨天ナルヲ以テ本日モ雨天ナルカト一同神痛致シ居チニ計ラサリキ本日ノ快晴、一同安堵ノ歎ヲ携シ、亘ニ快壮ノ語ヲ交シ発足ス

本堂、勤行、小篠、勤行

阿弥陀ノ森、勤行、小篠ヨリ廿五丁、又ハ二十丁トモ

普賢ヶ嶽、勤行、前宿ヨリ十八丁登リ、実ニ嶮

弥勒ヶ嶽、勤行、笹ノ岩屋、勤行、遙拜、此ノ所ヨリ岩本弥一、自村

北山村へ帰ル

児宿（チゴトマリ）、勤行、此ノ途中、嶮ナルコト言舌絶ナリ

七ツ池、国見ヶ岳、一名、七曜ヶ岳ト云、途中嶮言絶、同所ニテ中食ス時十一時三十五分

行者還リ、谷底、勤行、同所水アリ、携スル所ノ瓢ノ水吞器ニ汲取リ、之ヲ吞ミ始メテ蘇生ノ思ヒヲナス、途上ノ嶮難ナルコト実ニ言絶、名称ノ如ク如何ニ行者モ後還リナシタル所ナリト、左モアルベシト思ハル、国見岳ヨリ凡三十丁ト

一ノ田輪、勤行、爰ニテ法螺ヲ吹キ弥山ニ通ス、弥山ヨリ応答ス

講波世、勤行、正法理源大師ノ銅像アリ

弥山、又弥仙、午後五時三十分小着、講波世ヨリ当所迄ノ登リ坂、実ニ急ナリ、之レヲ正法ノ八丁登リト称フ、爰迄来ル途中ニテ充分勞レ居ル所へ最終ニ急坂ナルカ故ニ皆ナ声ヲ上リ

着後、直チニ大護摩修行、護摩師・余、神供師・晃玉

同所形ハカリノ參籠所アリ、爰ニテ投宿、此所ニ楠本真成ト云行人アリ、其ノ者カ此ノ參籠所主人ニシテ、宿泊人ノ賄等万事ヲナス、不由ナル所迎、布団迎ハナク、火爐ノ週圍ニ寝転ヒ夜ヲ明カス、尔然、余等ハ本山代參迎、新調セル良キ布団ヲ与ヘラレ、御陰ヲ以テ寒サヲ覚ヘス、快ク寝ニ就ク、暫時、楠本ノ太平楽ヲ聞ケリ、參籠所ニ弁才天ヲ安置セリ、勤行ス、弥陀経、尊勝陀羅尼、諸真言等、是レ即チ当山ノ本尊ナル由、本日ノ道筋奥駈第一ノ難所ニテ道ノ里程モ一番遠シト、山上ヨリ九里半

九日、快晴

午前第六時半出発、楠本ト袂別ノ螺声ヲ交ハシ発足ス

八経ヶ岳、勤行、同岳中西ニ向ヒ、古今宿、頂上岳、惣門、如来、金剛童子等遙拜

明星ヶ岳、勤行、金剛童子

菊ノ岩谷、勤行

禪師ヶ宿、勤行

船ノ田輪、勤行、金剛童子、弥山ヨリ当所迄二里

楊枝ノ宿、勤行、時九時四十五分、当所ニテ新宅作兵衛ノ追善ヲナスヲ例トス、此ノ者、此ノ辻ノ人ナル由ナレドモ此ノ所ニテコゴヘ死ナ



シタル付、遺骸ヲ同所傍ニ埋葬セリト、十如是、自我偈、諸真言等ヲ  
 施ス、当所ニテ中食ス、此ノ所甚タ寒セリ

空八ヶ岳、勤行、登リ八丁、実ニ嶮ナリ、此登リ途中ニテ遙向ノ青不  
 動岩谷ヲ遙拝ス、此岩高サ十六丈ト

孔雀ヶ岳、勤行、時正午

小尻還シ、此所道嶮ニシテ山刀ノ小尻ヲ還ヤサネバ通レサル程ノ所ナ  
 リ、依テ名ヲ付クト

椽ノ鼻、時零時半、此ノ所絶景、見下スコト幾千尋、恨ムラクハ生憎  
 暫時ノ霧群ニ襲ハレ充分ノ欲ヲ尽ス能ハス

五百羅漢、通路右手遙向ニ見ユ

座禪石、同上、役小角座禪ヲナシタル所ト、幾多ノ岩石中ニ峙立セリ  
 鉄鉢石、勤行、午後一時

杖捨、釈迦ヶ岳へ登ル途中ナリ、此ノ所道嶮ニシテ不知杖ヲ失セシ所  
 ト、依テ名ヲ付ス

念仏橋渡ル、嶮ナリ

馬ノ背、道幅セマクシテ両端嶮ナリ、馬ノ背ノ如ナルヲ以テ名付ク  
 釈迦ヶ岳、勤行、小ナル堂アリ、傍ラニ測量台アリ、見晴佳ナリ、本

尊ハ黄金ノ三尊仏ナレドモ盜難ノ恐レアルヲ以テ前鬼山へ持下ケ奉護  
 ス、杖捨ヨリ当所迄ノ登リ嶮ナルコト又言絶、之レヨリ深山ニ下向ス

都津門、又、極楽の東門トモ云、行場アリ、岩ノ丸門を抜ケ、岩崎ヲ  
 廻リ元ニ還ル、恐シキコト平等岩ヨリモ甚シ

深山、着二時三十分、大護摩修行、護摩師・晃玉、釈迦ヶ岳ヨリ十八

丁、終テ午後四時

同所香精水、勤行、途中灌頂堂跡アリ、此ノ所護摩支度等ハ前鬼山森  
 坊登山準備シ待受ケ居ル、是ヨリ前鬼山ニ下向ス

聖天ノ森、勤行、金剛童子

大日ヶ岳、頂上ニテ勤行、行場、大ナル巖石ナリ、頂上ヨリ大ナル鎖  
 下カレリ、其ノ鎖ヲ持、巖上ニ登ル、氣ノ弱キモノハ途中ニ於テ躊躇

セリ

岳中名所（雨ノ蓋石、風ノ蓋石）

背比へ石、才ノ河原、爰迄ノ途中、実ニ嶮ナリ

（金加羅石、制多伽石、行場、此ノ大小ノ石ノ周圍ヲ廻ル

妙見宮、勤行、前鬼山内ノ氏神ト云

前鬼山、午後五時四十分着、森本坊ニ投宿、住職・五鬼継義円、此ノ  
 坊建物相当広クシテ清潔ナリ、山門派、此ノ山内ニ五坊アリ、森本

坊、小中坊、行者坊、不動坊、中之坊、皆ナ世襲寺ニシテ妻帯アリ、  
 右五ヶ坊ヲ以テ孤立ノ小村ヲナセリ、其ノ他ニ家屋ナシ、右五坊、

年々交番ニ聖護院ノ宿ヲナスヲ例トス、而シテ本年ハ行者坊ノ当番ノ  
 所、住職僧老体ナルヲ以テ務ムルニ堪ヘス、依テ森本坊之レニ代ル

（此ノ老僧ハ義円ノ父ナリト）、夕方、当坊護摩堂ニ於テ初夜勤行ス  
 （弥陀経）

十日 快晴

本日、同所ニ滞留、午前八時頃ヨリ同所裏行場名所見物ス、住職義円  
 案内ス

## 名所

赤坂ノ地藏、垢離取、行場、絶景

手水ノ滝、大黒石、行者ノ阿伽井、大師ノ阿伽井、三宝荒神ノ滝

(梵天ノ滝、日光ノ滝、月光ノ滝) 此ノ三ヶ所行カズ

弁天ノ森、白山権現、馬頭ノ岩谷、馬頭ノ滝、丈ヶ六十間、見事ナリ

金剛界ノ岩谷、勤行

千枚塔婆、行者、千枚塔婆ヲ一日一枚宛ヲ納メ、千日ノ行ヲナスト

護摩壇石、千枚塔ノ傍ニアリ

胎藏界ノ岩谷、一名、才ノ河原ト云、余モ結縁ノ為、小石ヲ以テ塔ヲ

積置ク

千手ノ滝、丈ヶ八十間、見事ナリ

不動ノ滝、丈ヶ百二十間、見事ナリ、此ノ所、相集リ木石ヲ投落ス、

滝ノ丈ヶ長キカ故ニ木石ノ諸所ノ巖石ニ中リ下ニ落ル迄ニ粉微塵トナ

ル、実ニ小気味能シ、一同、数日来ノ勞ヲ忘レ快ヲ覺ユ

屏風ノ横駈、行場

廿八宿、行場、鎖ヲ以テ巖間ヲ登ル、嶮ナリ

鷲ノ窟、鷲ノ口嘴岩

以上

森本坊ヨリ最終行場迄廿五丁ト、此ノ所途中、山蛭多シテ不知足ヲ汲

フニハ実ニ困ル、十二時過キ帰坊、大野村・小西定吉ナルモノ奴田ノ

宿迄ノ道苻ヲナシ、当坊へ来ル、聖護院ヨリ先ニ申付タルナリ、案内

者・松谷松藏、本日ニテ解雇

## 十一日、快晴

午前六時出発、五鬼繼氏ノ見送ノ螺声ヲ後ニシ、般若岳ニ登ル(小西

定吉案内ス)

嫁越峠、勤行、頂上、金剛童子

劍光門、勤行、劍光童子、同所ニテ中食ス、午前十時

持経ノ宿、勤行、十二時

平治ノ宿、勤行、二時四十分

金剛ヶ峰、勤行、金剛童子

奴田ノ宿、勤行、四時三十分、同所ニ宿泊ス、宿所小ナル参籠堂ニシ

テ不便極ル所ト云ヘトモ、爰ヨリ二里山下、浦向村ナル本山神變講社

員ノ登山シ周旋ナシ呉タルニ付、食事等不自由ナク、護摩寿等モアリ

テ、山頂ニテハ充分ノ対遇ト云フヘシ、結構ニテアリシ、而リト云ヘ

トモ寝具ハナキユヘ、携帶スル所ノ毛布ニテ身ヲマトヒ、火爐ノ暖ヲ

取り寝ニ就ク、日々ノ勞レニヨリ就寝早ヤ前後不知、夢ハ山中ヲ駈ケ

廻レリ、前鬼ヨリ凡五里

十二日、雨天

午前六時出発

佐田辻ノ宿、勤行、金剛童子

行仙ノ船ノ田輪、勤行、佐田辻新道路ノツイ上ニアリ

カラ池、行仙ノ宿、勤行、一名、仙ヶ岳転法輪ト云

笠捨、勤行、金剛童子

檜ノ宿、勤行

地藏ヶ岳、勤行、地藏尊、此ノ登り実ニ險阻ナリ

宿所へ着時前十一時三十分、吉野郡十津川村大字葛川・森下岩治郎方ニ投宿ス、当村戸数廿五戸ニ過キス、貧家多キ様ニ見エ、森本家ハ村内有力ノ富家ノ由、而リト云ヘトモ不便ナル所ニシテ、食物等至テ粗末ナリ、ナンバガ名物ナリ、茶菓子ノ代リニ沢山出ダス、奴田ヨリ凡四里、午後七時頃ヨリ宿所森本家ノ求ニ依リ大護摩修行、場所同家門内、護摩師、余

十三日、晴天

午前七時三十分出発、古屋ノ宿ヲ脇ニ見テ新道峠ヲ越ユ、行クコトニ里、玉置山

玉置神社、勤行、十時二十分、十津川五十九ヶ村ノ氏神ニシテ、郷社ナリ、社及庫裏等、相当ノ建物ナリ、同所ニテ中食ス、神官ヨリ茶ヲ出ス

水呑金剛童子、勤行

貝摺峠

五大尊ヶ岳、勤行、此ノ道險阻ナリ、笹尾ハ分レ道ヨリ堺トシテ紀州地ニ入ル

六道ノ辻、勤行、二時三十五分、此ノ所迄、聖門徒弟・岩上源藏ナルモノ出迎ニ来リ居ル、紀州東牟婁郡三里村大字切原小字山在・大峯能吉方ニ投宿ス、農家ニテ座敷及食物等、万事不都合ナリ

十四日、雨天

午前、同所吹越山ニ於テ大護摩修行、終テ本宮ニ向フ

七越ノ地藏、勤行、夫レヨリ上下シテ熊野川ニ出リ、同所備へ崎ノ渡ヲ渡リ、本宮町ニ着ス

熊野神社、勤行、町ノ端シニアリ、此ノ社、元十二社アリシ所、明治廿二年ノ大水ニ押流サレ、今四社残レリ、惜ムヘシ、勤行終テ、同町旅館・山口屋ニ入り中宿ス時十二時三十分、吹越ヨリ五十丁、是ヨリ湯峯ニ至ル、途中名所アリ、小栗判官車納ノ峠（塚アリ）、蒔カズノ稻等、名ニ聞ク紀ノ国音無川ハ本宮町ヲ横切り、熊野川ニ落ち合ス、此ノ川幅、凡ソ五間ト、余ノ平常想像スル所ニ依レハ、余程大キナル川ト思ヒシニ案外小ナリシ

湯ノ峯、着、後二時四十分、東牟婁郡四村大字湯ノ峯ト称ス、同所宿屋業・西善方ニ投宿ス、此ノ所戸数凡ハ三十戸、中央ニ川アリ、其ノ川筋所々ニ鈿泉湧出ツ、実ニ奇觀ナリ、着後直チニ温泉ニ浴ス、温泉場上中下ノ三等二分ツ、湯銭一日分、上等二銭、中等一銭、下等六厘ナリ、湯ハ実ニ清潔ニシテ澄ミ渡レリ、氣持能シ、本宮ヨリ山間ニ入ルコト廿五丁ナリ、此ノ道、西国札所第二番・紀三井寺へ行ク道ナリト

十五日、雨、後晴

午前、同所薬師堂前ニテ大護摩修行（施主）、終テ出発、本宮ニ還ル、同所山口屋ニテ中食ス、時十時、当所ノ修檢（当山派）大正院・瀬川俊良、正教院律彦ノ二人、湯ノ峯途中迄、出迎ニ来ル、中食終テ出発、和船ニテ熊野川ヲ下ル、里程九里八丁（船賃一人前三十七錢五厘）、新宮町ニ着、午後三時

新宮神社、勤行、町ニ西北端ニアリ

此ノ社モ本宮ト同ク十二社アリシニ明治十六年ノ火災ニテ焼失スト、  
 当今漸ク三社建シアリ壯觀ナリ、勤行終テ同町旅館・大和屋・佐々木  
 天龍方ニ投宿、此ノ宿屋ノ主人ハ元ト禪宗僧侶ナル由、大和ヨリ出デ  
 タルニテ精進料理ハ可ナリ上手ナリ、対遇親切ニシテ旅宿料モ安価ナ  
 リ、当戸数三千戸ト、人家建物凡テ美麗ニシテ諸商共ニ繁昌セリ、警  
 察署アリ、郵便、電信局アリ、遊廓アリ、料理店アリ、本日始メテ町  
 ラシキ所ヘ出タリ、自然精神快活トナル、元新宮城ノ城下ナリト、本  
 日、旅費金不足セルヲ以テ電報ニテ送金方アリ、聖護院ヘ通知ス時第  
 三時過、午後八時頃返電来ル、一同其ノ手續キノ早キヲ驚喜シ、開キ  
 見ルニ送金ナラズ、曰ク(マニアワス、アスラクル)ト、先ツ一同安  
 途シ寝ニ就ク

十六日、曇天

昨日ノ電報ノ件ニ付、滞在、電報為替来ルト云ヘドモ字ノ相違ニテ不  
 渡、故ニ又誤字訂正願方ヲ聖護院ヘ打電スル等ニテ、彼是本日モ終ニ  
 金受取ル能ハス

十七日、快晴

本日電為替金受取ル為メ船寺及中野ヲ後ニ残シ、其ノ他、前六時出發  
 ス、行クコト二里、同郡三輪崎、当所戸數四百モアランカ、又行ク  
 コト二里半、補陀落山・補陀洛寺ニ參詣ス、是ヨリ那智山ニ向フ、行  
 クコト凡一里、同郡伊関村旅人宿・楠本屋着、携帯ノ荷物ヲ預ケ中  
 食、弁当ヲ用ユル用意等ヲ托シ置キ、那智山ニ參詣、此道一里、先ツ

名高キ瀑布ヲ見物ス、此滝高サ実測七十五間ト、途中ニ腰打ナク直線  
 ニ流下シ、其ノ景ノ佳絶ナル言シ方ナシ(全国第一ノ瀑布ト)、那智  
 ノ觀世音本堂建物壯觀、本尊如意輪、麓ヨリ十八丁

熊野権現、勤行、社十二社建並ヒ壯觀ナリ(本宮・新宮・当社)ヲ以  
 テ熊野三所ト号ス、当社ニテ峰中修行終ル、楠本屋ニ戻リ中食ス、午  
 後二時半ナリキ、是ヨリ勝浦ニ向フ、元来リシ途ヲ二十丁余後戻リス  
 (即チ勝浦ニ至ル途次ニアラズ一里余入込ナリ)、午後四時勝浦村ニ  
 着、同所船宿なぎさ屋ニ入ル、新宮ニ残りシ船寺ハ、金ヲ受取レハ那  
 智山ヘ參詣セス直チニ勝浦ニ向フベキ約ナルニヨリ、定メシ先キニ同  
 所ヘ来リ居ルナラント思ヒシニ来リ居ラズ、先ツ心痛、兎毛角、足ヲ  
 清メ二階ニ上リ一同心痛、船寺ノ噂トリドリ、先ツ漸次入浴シ待ツコ  
 ト二時間余ニシテ来ル、一同安途ノ思ヒヲナス、夕食終リ、乗船ノ準  
 備ヲナス、午後十一時、乗船(神田丸)、十二時過、出帆、大坂ニ向  
 フ

十八日、晴天、船中

十九日、快晴

午前四時、大坂川口着、下船、北区・渡辺橋通り桜橋詰旅館・西桜楼  
 ニテ朝食、夫ヨリ八時四十二分、梅田発ノ汽車ニ乗シ京都ニ向フ、午  
 前十一時、聖護院ヘ帰着

- (1) 園城寺藏本。尚、即伝撰という『修験修要秘決集』巻下「第一灌頂啓白」(増補改訂『日本大藏経』、以下『日蔵』と略記、第九四巻、修験道章疏三、一九七七年)、当山派の『峰中正灌頂外場作法』(『日蔵』第九二巻、修験道章疏一、一九七六年)啓白文にも同文がある。また、本山派の『両峯問答秘鈔』(『日蔵』第九五巻、修験道章疏四、一九七七年)には「此山者、直二胎金兩峰ノ靈地ト為シ、密嚴華藏ノ淨土ニ分ケ仍テ諸尊聖衆之所居、賢聖遊止之壇場、古仙経行之靈洞」とある。
- (2) 旭蓮撰『修験秘奥鈔』(『日蔵』第九二巻、修験道章疏一、一九七六年)「山林抖敷之事」に「抖敷トハ漢名也、梵語ニ頭陀ト云、翻シテ抖敷ト云、抖敷トハ打払ト読ム也、山林ニ隠居シ煩惱ヲ抖敷シテ五塵ニ染ラザル義也」とあり、一般には煩惱を捨て去り山中を歩いて修行することを指す。本山派『両峯問答秘鈔』(『日蔵』第九五巻、修験道章疏四、一九七七年)にも「抖敷」とは「役優婆塞ノ跡ヲ慕ヒ、忝ナクモ凡足ヲ以テ毘盧ノ頂上ヲ踏ム、偏ニ過分之至極、難行之得益也」とある。
- (3) 池上広正「山岳信仰の諸形態」(『山岳宗教の成立と展開』山岳宗教史研究叢書一、一九七五年)。
- (4) 『日蔵』第九五巻、修験道章疏四、一九七七年。
- (5) 筆者は、一九八六年から一九九七年まで天台寺門宗の大峰奥駈修行に参加した。
- (6) 天台寺門宗の奥駈については、宮家準『大峰修験道の研究』(一九八八年)に「三井寺でも部分的に南奥駈を行っている」(三五頁)、また同氏『修験道儀礼の研究』(一九九九年)では「特に大峰修行は古来の本山派の伝統にもとづいて熊野から吉野に向かう順峰の形で行っている」(八四二頁)との言及がある。
- (7) 宮家準『修験道組織の研究』(一九九九年)第八章等参照。
- (8) 『日蔵』第一〇〇巻、一九七八年。
- (9) 『修験道史料集Ⅱ』山岳宗教史研究叢書一八、一九八四年。
- (10) 奈良県教育委員会『大峰奥駈道調査報告書』、二〇〇二年。
- (11) 『日蔵』第九六巻、修験道章疏五、一九七七年。
- (12) 『修験道史料集Ⅱ』山岳宗教史研究叢書一八、一九八四年。
- (13) 平山敏治郎「天保十年聖護院宮入峰随伴記」『檀原考古学研究所論集』第七、一九八四年。
- (14) 戦前の『修験』は、大正十二年の創刊号から昭和十八年の第一二四号までが、名著出版より全十冊で復刻されている。
- (15) 『修験』第八号、一九二四年。
- (16) 『修験』第二十号、一九二六年。
- (17) 天台寺門宗所蔵。
- (18) 本山派の歴史については、和歌森太郎「修験道史の研究」(『和歌森太郎著作集』第二巻、一九八〇年)一五八頁以下並びに宮家準『修験道組織の研究』(一九九九年)五四三頁以下等参照。
- (19) 『日蔵』第九五巻、修験道章疏四、一九七七年。
- (20) 順峰と逆峰については、『両峯問答秘鈔』(『日蔵』第九五巻、修験道章疏四、一九七七年)に「熊野自り入り吉野二出ルヲ順ト云フ、吉野自り熊野二出ルヲ逆ト云フ」、日数は「順百箇日、逆七十五箇日也」とある。『修験修要秘決集』(『日蔵』第九四巻、修験道章疏三、一九七七年)巻中「第一峰中十界修行ノ事」には「是ニ於テ順逆ノ二峰有り、順峰トハ無明縁起ノ軌則、從因至果之修行也、逆峰トハ法性縁起表示、從果向因之修行也」とある。
- (21) 註(10)奈良県教育委員会前掲書。
- (22) 註(13)平山敏治郎前掲論文。尚、聖護院門跡は一世に一度の盛儀として十九歳のときに七月二十五日に入峰する先例があったとの同氏の指摘は興味深い。また、正徳三(一七二二)年の聖護院道承の自筆日記「癸巳入峰記行」及び「峰中秘所並靡次第」(共に聖護院所蔵)による日程もやはり七月二五日京都出発、八月二十四日から奥通りへ、九月三日日本宮着と、その間の諸方参拝や儀礼もほぼ同様である(註(10)奈良県教育委員会前掲書第四章第六節及び第八節参照)。

- (23) 註(7) 宮家準前掲書八三頁
- (24) 宮家準『大峰修験道の研究』(一九八八年)第四章第三節参照。『大峰山峰中秘密絵巻』は天明七(一七八七)年、桜本坊第五一世快活法印が絵師に描かせた紙本淡彩の上下二巻からなる絵巻で、一九六六年、桜本坊第六五世巽良海により刊行された。
- (25) 註(10) 奈良県教育委員会前掲書。
- (26) 註(10) 奈良県教育委員会前掲書。
- (27) 註(10) 奈良県教育委員会前掲書。
- (28) 註(10) 奈良県教育委員会前掲書には「十津川水害によってこの宿跡は流出したとされ、尾根の西側が一段と低くなり、窪地状になっているのが、その際の地滑り、亀裂の痕跡とされている」とある。
- (29) 註(10) 奈良県教育委員会前掲書。
- (30) 宮家準『修験道儀礼の研究』(一九九九年)八四〇頁。
- (31) 宮城信雅『大峰山の靈蹟に就て』(『修験』第二十号、一九三六年)。
- (32) 『修験』第一号(一九三三年)所収「入峰修行記」には「従来は笹の岩屋より再び岩本宅に帰ったのであるが、本年より此道を通る」とある。
- (33) 註(29) 宮城信雅前掲論文。
- (34) 註(29) 宮城信雅前掲論文、第十三行所「香精山」の項。
- (35) 『寺門』第三七号、一九五六年。
- (36) 註(29) 宮城信雅前掲論文。
- (37) 例外的なルートとして、一九三四年の役行者降誕千三百年記念願經埋納慶讀大入峰では、上葛川から花折峠を経て玉置山に登り、玉置山から瀨八丁まで下り、船で北山川を下り、さらに宮井から熊野川を遡り、切原から吹越山に至っている。
- (38) 天台寺門宗では「寺門派当時ヨリ大峰入峰及奥駈修行ノ指導ハ従来檢校(長吏)ノ代行トシテ聖護院門跡ニ委嘱サレテ来タノデアリマスカ、昨年ノ春修験宗トシテ本宗ヨリ離脱独立サレマシタノデ本宗デハ本年ヨリ檢校指導ノモトニ」行われることになった(『寺門』第二号、一九四七年)。
- (39) 『寺門』第二九号、一九五二年。
- (40) 『寺門』第二九号、一九五二年。
- (41) 『寺門』第三七号、一九五六年。
- (42) 『寺門』第四一號、一九五七年。
- (43) 『寺門』第三三號、一九五五年。
- (44) 註(29) 宮城信雅前掲論文。
- (45) 註(29) 宮城信雅前掲論文。
- (46) 『寺門』第二六・二七合併号、一九五四年。「深仙灌頂堂は今將に腐朽倒壊に瀕す、依つて之が再建並びに諸施設の完整を期するや切なり」とある。
- (47) 『寺門』第三八・三九合併号及び第四一號、一九五七年。
- (48) 平治宿山小屋は、一九九一年、新宮山彦ぐるゝぶにより改築された。
- (49) 宮家準『大峰修験道の研究』(一九八八年)三八〇頁以下参照。奥駈業衣会では、聖護院協賛のもと一九七七年七月十六日から二十日にかけて前鬼から本宮までの南奥駈道全コースを歩いているが、この時も上葛川に下りて宿泊している。
- (50) 『寺門』第一一三號、一九七五年。また、那智山青岸渡寺副住職・高木亮英師を中心とする熊野修験では、一九八八年から毎年、順峰で奥駈修行を行っている。
- (51) 一九八九年には、新宮山彦ぐるゝぶにより佐田ノ辻に行仙宿山小屋が建設された。これに現在、前鬼と玉置山の中継宿所として行仙宿、平治宿、持経宿の三ヶ所が健在で、南奥駈道を修行する者にたいへん便なるものがある。
- (52) 二〇〇六年二月、行政や関係社寺等から構成される世界遺産「吉野大峯地域」整備保全事業連絡協議会が設立され、奥駈道の保全整備事業の促進に向けて協議が始まった。